

第3学年D組 国語科授業案

日 時 平成26年6月17日（月）第6校時

場 所 3D教室

授業者 森 卓也

1 単元 “忘れられない味” って何だろう （生活を語り合う）

2 単元の構想

（1）本単元で目指す子どもの姿

子どもは、自分の好きな食べ物の味を文章で表現するために、モデルとなるエッセイや仲間の作品の工夫について追究し、表現方法を活用してエピソードを書くよさに気づく。体験や思いを交え、自分だけの味を表現した子どもは、相手を意識して、文章を書くようになる

（2）本単元で獲得させたい力

子どもたちは、自分の体験や思いを話したり、書いたりすることが好きである。しかし、語ることで自体に満足してしまい、どうしたら相手にきちんと伝わるのかを考え、文章を吟味することが苦手である。文章のどの部分を膨らませ、どの部分を削るのか、相手の立場にたって伝わるように書くことに弱さをもっている。

本単元は、あるお菓子を子どもが実際に食べ、その味について自分の言葉で表現する活動を導入とする。そのなかで、子どもたちは、目には見えない味というものを言葉で表すことの難しさを知る。そこで、食べ物エッセイ「とん汁」（小泉武夫）にふれ、擬音語・擬態語や比喩、諸感覚を使った表現、まとめ方の工夫などの分析を通し、表現方法について捉える力を育てていく。そのなかで、自分にしか書くことのできない素敵な文章を書きたいという思いを子どもはもつだろう。そこで、エッセイ「わが人生のサッポロ一番みそラーメン」（森下典子）に出会わせる。味そのものだけでなく、自分の体験を具体的にエピソードとして書くことで、今までより詳しく、自分の表現したい味や思いを書くことができそうだと気づいた子どもは、心情表現や会話などの表現方法を使いながら、文章を練り上げる力を育てていく。そして、それらを自分の文章に生かしながら、子どもは、自分にとって忘れられない味を書くために、自分の体験や心情を表現する力を育てていく。

（3）はたらきかけと「学んだこと」を行動につなげる子どもの姿

まず、実際に、あるお菓子を食べる活動を行う。すると、子どもは、その味を自分の言葉で表現しようとし始める。そして、実際の味と自分の文章を比較することで、味覚という、人によって違う感覚的なものを表現することの難しさを実感しながらも、その味をどう表現するかについて考え始める。

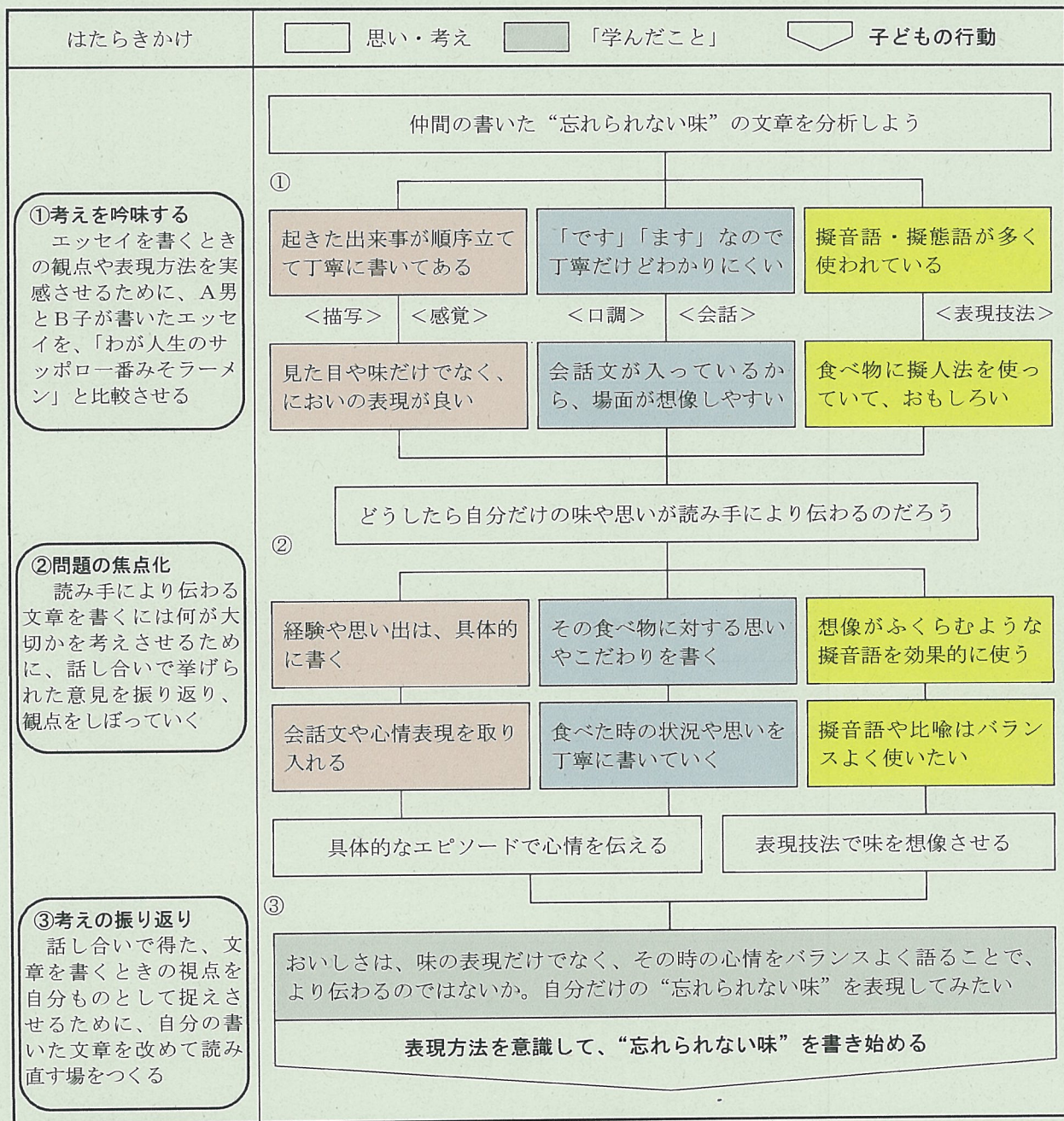
そこで、二つの食べ物エッセイを用意する。一つ目の「とん汁」（小泉武夫）では、擬音語・擬態語、比喩、諸感覚の表現など、味を伝えるための方法に気づき、それを表現しようと考え始める。しかし、それだけでは、文章として何が足りないと感じた子どもに、二つ目のエッセイ「わが人生のサッポロ一番みそラーメン」（森下典子）と出会わせる。自分の体験や思いをエピソードとして入れることで、自分の伝えたい味や思いがより詳しく伝わるのではないかと気づいた子どもは、これまでの生活を振り返りながら、自分にとっての忘れられない味を表現していく。

第10時から、それぞれに書いた文章を互いに鑑賞し合いながら、自分の使った表現方法やエピソードの有効性を検証する活動を行う。すると、目に見えないものを相手にわかりやすく伝えることに楽しさを感じた子どもたちは、エピソードの書き方や表現方法を意識しながら、さまざまな文章を分析しようとする。そして、かけがえのない自分の体験や思いを伝えようと、意識して文章を書き始める。

4 本時の構想 (11/15)

子どもは、食べ物エッセイ「とん汁」(小泉武夫)で、擬音語・擬態語、諸感覚を使った言い方、比喩などの表現方法を分析した後、実際に文章を書いた。そして、書いた文章を分析するなかで、思いを表現することのよさに着目した仲間の意見にふれ、2つ目のエッセイ「わが人生のサッポロ一番みそラーメン」(森下典子)に出会った。そこで、味そのものだけでなく、エピソードを描くことで、心情と味が伝わることを知った子どもたちは、自分にとっての忘れられない味を文章として書き始めた。

本時は、前時まで子どもが書いてきた文章の中から、2作品を選び、全体の中で、具体的に、その文章の工夫や良さ、または足りなさについて分析をしていく。そのなかで、小泉武夫と森下典子のエッセイを比べる意見も取り上げ、擬音語や擬態語、比喩、感覚などの表現方法やエピソードの描き方について考える。その際、食べた時の場面の様子、会話、動作、感覚をつかった表現などの工夫を挙げながら、どうしたら自分だけの味を伝えることができるだろうという考えに焦点化していく。話し合いを進めるなかで、エピソードを具体的に書くことの有効性や、味そのものを伝える表現方法とのバランスを意識すれば、味や心情を表現することができることに気づく。そして、子どもは、もっと読み手に伝わる文章にしたいと思い、自分の書いた文章を振り返り、エピソードの部分を書き直し始める。



主なはたらきかけ	<input type="checkbox"/> 思い・考え <input type="checkbox"/> 「学んだこと」 <input type="checkbox"/> 子どもの行動	国語科で重視する力
<p>○認識を揺さぶる 味を言葉で表現してみたいと思わせるために、実際にお菓子を食べてその味をどう言葉で表現したらいいのかわかっているかについて考えさせる</p>	<p>いろいろな料理が好きだ 文章で正確に伝えるのは難しい</p> <p>味を言葉で表現できるのかな 1～3時</p> <p>「うまい」「甘い」しか思い浮かばない 味が伝わるように書くのは難しい 何か書くコツがあるのなら知りたい</p> <p>味を言葉で表現するのは難しいけれど、いろいろな表現があってもおもしろい。どうやって表現すれば、味を伝えられるのだろうか</p>	<p>☆捉える力 ・実際のお菓子の味と自分で書いた文章を比べたり、仲間の書いた文章を参考にしながら、よりよい表現に気づく</p>
<p>○問題の焦点化 どうやって表現すると自分の感じる味が相手に伝わるのかわかると考えたために、「とん汁」(小泉武夫)の文章を提示し、おいしさや表現方法について考えさせる</p>	<p>食べ物エッセイを分析し始める 4～7時</p> <p>擬音語や擬態語でインパクトを与えたい 食べ物自体や食べ方の様子を書くときよい 味覚以外の表現や動作も取り入れよう</p> <p>口の中での状況を擬音語で表現しよう 比喻などを使うとイメージしやすくなる 食べ方のこだわりを書くとおもしろい</p> <p>さまざまな表現方法を意識しながら書くことで、おいしさについては詳しく伝えることができそうだ。でも、おいしさだけを表現していても物足りない。自分の思いが詰まった、自分らしい文章を書きたい</p>	<p>☆捉える力 ・モデル文を読んでも、その文章の特徴(擬音語、擬態語の使い方、比喩、諸感覚の表現、まとめ方の工夫など)に気づく</p>
<p>○考えを吟味する 自分の思いが詰まった文章とは何かを考えるために、「わが人生のサッポロ一番みそラーメン」(森下典子)の文章と出合わせ、「とん汁」と比較させながら、味を言葉で表現するよりよい方法について考えさせる</p>	<p>情緒的な食べ物エッセイを分析し始める 8～9時</p> <p>思い出が語られていると読みやすい 食べ物そのものだけでは物足りない 味ってうまいまずいだけじゃないのかも</p> <p>思い出を書くとその人らしさが出る エピソードをうまく入れてみたい 味と一緒に自分の気持ちも書いてみたい</p> <p>エピソードや心情を書くと、自分にしか表現することのできないエッセイを書くことができそうだ。自分らしいエッセイを書いてみたい</p>	<p>☆練り上げる力 ・モデル文を読んでも、今まで書いてきた文章の違いについて比較しながら、その文章の特徴(エピソードの描き方、心情の表現など)に気づき、自分の書き方を見つめ直す</p>
<p>○考えの振り返り 前時までに意識してきた表現方法が実際に自分の文章に生かされているかを確かめるために、子どもたち同士で書いた文章を鑑賞し、分析させる</p>	<p>“忘れられない味”をテーマにして文章を書き始める 10～14時(本時11)</p> <p>その時の状況が分かるように具体的に思い出して、エピソードを書きたい エピソードの中に会話や動作などが入ると、より想像しやすくなる その時の状況や気持ちを丁寧に書くことで、おいしさ以外の感覚も伝わりそうだ</p> <p>ただ味だけを表現するのではなく、エピソードを効果的に書くことで、自分の心情も表現することができる。これから文章を書く時に、さまざまな表現方法を使って、自分の思いをきちんと相手に伝えたい</p>	<p>☆表現する力 ・仲間の作品や他のエッセイなど、さまざまな文章を読みながら、味についてだけでなく、その食べ物にまつわるエピソードをどう入れると効果的であるか考えながら書く</p>
	<p>表現に対する意識を高くもって様々な文章を書き始める</p> <p>目に見えないものをどう表現すればいいのかわかるといい</p> <p>この文章には、いったいどんな工夫が隠れているのだろう</p>	